

初期大乘仏典は誰が作ったか

——阿蘭若住比丘と村住比丘の対立——¹⁾

辛 嶋 静 志

1. 『法華経』勸持品の偈

『法華経』勸持品（第十二品）に見える偈頌は、『法華経』の成立に関して、ひいては大乘佛教の成立に関して重要な示唆を与えているが、従来、この点に関して全く注目されていなかった。おそらくその原因は、梵本からの現代語訳の諸翻訳者も、また鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』に対する古代中国の注釈家も——日本の『法華経』研究者は古代中国の注釈家の解釈に引きずられる傾向にある——、この偈頌を間違って解釈しているからであろう。

1.1. 梵本

『法華経』の問題の偈頌は次の様である。

KN.271.9 ~ 274.6²⁾

³⁾*ākrośāms tarjanās caiva daṇḍa-udguraṇāni ca /*

- 1) この論文は、Karashima 2001 の前半部分の和訳に若干手を入れたものである。
- 2) 以下、次にあげる比較的古い写本の読みが、Kern-Nanjio 本の読みと大きく異なる時、注記する。
 - (1) Bj = 北京、民族文化宮が所蔵していた貝葉写本（写真：民族文化宮 1984；ローマ字本：Jiang 1988; Toda 1989-1991）。
 - (2) D2 = the National Archives of India (New Delhi) 所蔵 Gilgit 写本（写真・ローマ字本：Watanabe 1972-1975）。
 - (3) D3 = the National Archives of India (New Delhi), the British Museum (London), Mr. M. A. Shah (Lahore) 所蔵 Gilgit 写本（写真・ローマ字本：Watanabe 1972-1975）。第 3-5 偈欠落。
 - (4) O = 所謂 Kashgar 写本。実際は Khādaliq で出土し、Kashgar で売られたもの（写真：Lokesh Chandra 1976；ローマ字本：Toda 1981: 3-225）。
 - (5) F = Farhād-Bēg 出土写本（ローマ字本：Toda 1981: 229-258）。なお、“***” は、写本に欠落していることを示す。
- 3) Bj. *ākrośanāṃ tarjanāṃ tādanāṃ caiva daṇḍa-udguruṇāṃni ca*; D2. *ākrośāms tādanāṃs caiva daṇḍa-udgiriṇāni ca*; O. *ākrośa tātanā bhikṣmā daṇḍāni mudgarāni*; F. *ākrośā tātanā bhikṣmā daṇḍā mudgarāṇāni ca*.

bālānām samsahisyāmo 'dhivāsiyāma nāyaka // 3
durbuddhinaś ca vaṅkāś ca śaṭhā bālādhimāninah⁴⁾ /
aprāpte prāpta-saṃjñi ca ghore kālasmi paścime⁵⁾ // 4
aranyavṛttakāś⁶⁾ caiva kanthām prāvariyaṇa ca /
saṃlekha-caritā asme⁷⁾ evaṃ vakṣyanti durmatī // 5
raseṣu grddha saktāś⁸⁾ ca grhīṇām dharma deśayī /
sakṛtāś ca bhaviṣyanti śaḍabhijñā yathā tathā⁹⁾ // 6
raudracittāś ca duṣṭāś ca grha-cintā¹⁰⁾ vicintakāḥ /
aranyaguptiṃ praviṣitvā asmākaṃ parivāḍakāḥ¹¹⁾ // 7
asmākaṃ caiva¹²⁾ vakṣyanti lābha-satkāra-nisṛitāḥ /
tīrthikā vat' ime¹³⁾ bhikṣū svāni kāvyāni¹⁴⁾ deśayuh // 8
svayaṃ sūtrāṇi granthitvā¹⁵⁾ lābha-satkāra-hetavaḥ /
parśāya¹⁶⁾ madhye bhāṣante asmākaṃ anukūṭṭakāḥ¹⁷⁾ // 9
rājeṣu rājaputreṣu rājāmātyeṣu cā (← vā) tathā¹⁸⁾ /
viprāṇāṃ¹⁹⁾ grhapatīnām ca anyeṣāṃ cāpi²⁰⁾ bhikṣuṇām // 10

4) O. *durbuddhinām ca vaṅkānām caṇḍābālādhimāninām*; F. *durbuddhinām ca vaṅkānā śaṭhābālādhi-māninām*.

5) O. *aprāpte prāptasamjñinām bhikṣūnām kāli paścime* (= F).

6) Bj. *aranyā-cintakāś* (= D2); O. *aranyā-vṛttakāś*; F. *aranyā*****.

7) Bj. *saṃlekha-vṛtti-dhārāya*; D2. *saṃlekha-vṛtta-cāri* (')sma; O. *saṃlekha-caritā asme*; F. *saṃlekha-caritā asmai*.

8) Bj. *grddhā saktāś ca*; D2. *grddhāḥ saktāś ca*; O. *grddhā ātmane*; F. *grddhāḥ ātmāne*.

9) O. *yathāiva te* (= F).

10) D2. *grhī-citta-*; A3. *grhāvittā-*; いくつかのネパール写本は *grhacittā-* と読む。蔵訳は, *khyim dang nor* (= *grha-vittā-*) (Nakamura 1986: 272.7). おそらく, 本来 *grha-vittā-* とあったものが, *grha-cittā*, *grhacintā* と誤写されたのであろう (cf. Karashima 1992: 160).

11) O. *parikuṭṭakāḥ* (= F).

12) Bj. *asmāś ca evaṃ* (= D3); D2.***; O. *asmākaṃ e***; F. *asmākaṃ eva. eva* は *evaṃ* の意味。韻律の関係で鼻音が落ちた (cf. BHSD, s.v. *eva*; Norman 1971: 168).

13) D2. *tīrthikā vata 'me* (= D3); O. *tīrthikevādi 'me*; F. *tīrthikāvādi 'me*.

14) *kāvyāni* は, 幾つかのネパール写本では *vākyāni* とある。Cf. Toda 1984: 239; Karashima 1992: 160.

15) Bj. *kaṭṭitvā*; D2. *gaṇitvā*; D3. *gaṇṭhitvā*.

16) D2. *parīśāya* (= D3, O, F).

17) Bj. *anukūṭṭanām*; D2. *anukūṭṭanām*; D3. *°kuṭṭanām*; O. *parikuṭṭakā*; F. *°kuṭṭakāṃh*.

18) Bj. *rājeṣu rājāmātreṣu rājāmātyeṣu cottamā*; D2. *rājeṣu ****jāmātyeṣu vā tathā*; D3. *rājeṣu rājaputreṣu rājāmātyeṣu vā tathā*; O. *rājānām rājaputrānām rājāmātyāna ca tathā* (= F). *ca* が韻律の関係で *cā* になっているが, それがさらに, *vā* と誤写されたようだ。v / c の混同については, 注 (10) を参照。

19) O. *brāhmaṇa-* (= F).

20) O. *caiva* (= F).

*vakṣyanty avarṇam asmākaṃ*²¹⁾ *tīrthyavādaṃ ca cārayi*²²⁾ /
sarvaṃ vayaṃ kṣamiṣyāmo gauraveṇa maharṣipāṃ // 11
*ye cāsmān kutsayiṣyanti*²³⁾ *tasmim kālasmi*²⁴⁾ *durmatī* /
*ime buddhā bhaviṣyanti*²⁵⁾ *kṣamiṣyāma 'tha*²⁶⁾ *sarvaśaḥ* // 12
*kalpa-saṃkṣobha-bhīṣmasmin*²⁷⁾ *dāruṇasmi mahābhaye* /
yakṣarūpā bahū bhikṣū asmākaṃ paribhāṣakāḥ // 13
*gauraveṇēha*²⁸⁾ *lokendra utsahāma suduṣkaram* /
*kṣāntīya kaksyām*²⁹⁾ *bandhitvā sūtram etaṃ prakāśaye*³⁰⁾ // 14
anarthikā 'sma kāyena jivitenā ca nāyaka /
*arthikāś ca 'sma bodhīya*³¹⁾ *tava nikṣepadhārakāḥ* // 15
*bhagavān eva jānīte*³²⁾ *yādṛśāḥ pāpabhikṣavaḥ* /
paścime kālī bheṣyanti saṃdhābhāṣyam ajānakāḥ // 16
*bhṛkuṭī sarva*³³⁾ *sodhavyā aprajñaptiḥ punaḥ punaḥ* /
*niṣkāśanaṃ*³⁴⁾ *viharebhyo bahukutṭi*³⁵⁾ *bahūvidhā* // 17
ājñaptim lokanāthasya smarantā kālī paścime /
*bhāṣiṣyāma idaṃ sūtram paśan-*³⁶⁾ *madhye viśāradāḥ* // 18
*nagareṣu ca grāmeṣu*³⁷⁾ *ye bheṣyanti*³⁸⁾ *ihārthikāḥ*³⁹⁾ /

21) O. *asmākāvarṇa bhāṣanti*; F. *asmākam avarṇa bhāṣanti*.

22) Bj. *tīrthavādaṃ ca cārayi*; D2. *tīrtha-vādaṃ ca cārayet* (= D3); O. *tīrthikā vāca cārayi*; F. *tīrthikāṃ vāca cārayi*.

23) O. *kupsayiṣyanti*; F. *(ku)p(sa)yiṣyanti*.

24) Bj. *kālesya*; D2. ***; D3. *kālesmi* (= O, F).

25) O. *ime buddhā 'ti vakṣyanti*; F. *ime buddhā 'ti vakṣyanti*. 漢訳はこれら中央アジア本と一致する (cf. Karashima 1992: 161, 335).

26) Bj. *kṣamiṣyāyuṣa* (a corruption?); O. *adhivāsiṣyāma* (= F).

27) O. *-bhikṣasmin*; F. *-bhī****.

28) Bj. *gauraveṇa te*; D2. *gauraveṇa ti* (= D3); O. *goraveṇā ti*; F. *goravaiṇa tu*.

29) Bj. *kakṣam*; D2. *kakṣām* (= D3); O. *kakṣyām*; F. *kaccha*.

30) Bj. *prakāśayi*; D2. *prakāśayī* (= D3); O. *prakāśaye*; F. *prakāśayit*.

31) Bj. *arthikāś cāśma bodhāya*; D2. *arthikā cāśma bodhāya* (= D3); O. *arthikā vāya bodhāya*; F. *arthikā vāyam bodhāya*.

32) O. *jānāti* (= F).

33) D2. *bhṛkutyā sarvi* (= D3); O. *bhṛkuṭī tivrrā*; F. *bhṛkuṭī tivra*.

34) O. *niṣkālanā* (= F).

35) Bj. *bahu-kutṭa*; 他のネパール写本には *baddha-kutṭi*, °*kūṭi*, °*kūṭā* などとある (cf. Toda 1984: 239; Karashima 1992: 161); D2. *baddhra-kutṭā* (= D3); O. *upākrrausā*; F. *upākkrośā*.

36) O. *paśiṣa-* (= F).

37) Bj. *nagareṣu atha grāmeṣu* (= D2, D3, O, F).

38) O. *bhaviṣyanti*; F. *bhaviṣya(nt)i*.

39) O. *arthikā*; F. *(a)rthikāḥ*.

*gatvā gatvāsya dāsyāmo nikṣepam tubhya*⁴⁰⁾ *nāyaka* // 19

1.2. 和訳

これらの偈を、松濤誠廉、丹波昭義、桂紹隆訳『法華経』Ⅱ（『大乘仏典』5，中央公論社，1981），58f. は次のように訳している。

指導者よ、私どもは愚か者たちに罵られようとも、威嚇されようとも、棒きれを振りまわされる（ような目にあいましょう）とも、それらを耐え忍びましょう。（三）
また、のちのすさまじい時代には、（比丘たちは）悪意をいただき、心がひねくれ、欺瞞的で、愚かで、しかも思いあがっていて、いまだ得てもいないのに得ていると妄想するでしょう。（四）

知恵劣るものたちは、森林での生活（阿練若）を守り、ぼろをつづった衣（納衣）をまとっただけで、「われわれは耐乏の生活を行なっている」と言うでしょう。

（五）

味覚の楽しみに貪りとらわれているものが在家の人々に教えを説き、六種の神通をそなえた（阿羅漢）のように敬われるでしょう。（六）

（彼ら）私どもを誇るものたちは、（内に）兇暴な心をいただき、憎悪をたぎらせ、家庭や財産に心を奪われながらも、（比丘にふさわしい）森林（を住処とする）というかくれ簑にかくれて、（七）

私どもについてこう言うでしょう。「これらの比丘たちは異教徒であって、利得と名誉にとらわれて、自分たちの（勝手気ままな）言い分を教える」と。（八）

（また、）「利得と名誉を求めて、自分で經典を編纂して、集会のまんなかで説教する」と私どもを罵るものもいるでしょう。（九）

国王たちにも、王子たちにも、同じく、王の大臣たちにも、バラモンたちにも、家長たちにも、さらに他の比丘たちにも、（一〇）

私どものことを非難して、「異教の教義をひろめるもの」と言うでしょう。（しかし、）私どもは偉大な聖仙たちを尊敬することによって、（その）すべてを耐え忍びましょう。（一一）

また、その（のちの）時代には、愚か者たちが私どもを侮って、「このものたちは仏陀となるのだ」と言おうとも、私どもはそれをもすべて甘受しましょう。（一二）

40) Bj. *tava* (= D2, D3); O. *tubhya* (= F).

恐ろしい劫の動乱（濁劫）の時期に、激しい大きな恐怖のなかで、ヤクシャの形相をした多くの比丘たちが私どもを罵倒しよう（とも）、（一三）

私どもは世間の王（仏陀）に対する尊敬心をもって、この世に（とどまり、この）きわめてなしがたい仕事を忍受し、忍耐という腹帯（忍辱鎧）を締めて、この經典を説きひろめましょう。（一四）

指導者よ、私どもは身体も生命も惜しむものではありません。私どもは（ひたすら）菩提を求めるもの、あなたの委託されたものを受持するものです。（一五）

のちの時代には、（この）深い意味が秘められたことばを知らない、悪しき比丘たちがいるであろうことについては、世尊ご自身がごぞんじです。（一六）

眉をひそめられたり、くりかえし何度も、（座席を）割り当てられなかったり、精舎から追い出され（擯出）たり、種々の悪口雑言を浴びせられても、私どもは（その）すべてを耐え忍ぶべきです。（一七）

のちの時代において、世間の保護者の命令を思い起こして、私どもはおそれなき自信をもって、集会のまんなかでこの經典を説くでしょう。（一八）

指導者よ、この世に（この教えを）求めるものがいれば、城市でも村でも、どこまでもたずねて行って、あなたから委託された（この教え）をその人に伝えましょう。（一九）

1.3. 鳩摩羅什訳

羅什訳の『妙法蓮華經』にも対応する偈頌がある（大正9, 36b23-37a1）⁴¹⁾。以下に梵本の5～11偈に対応する部分を引用しよう。

或有阿練若 納衣在空閑 自謂行眞道 輕賤人間者
 貪著利養故 與白衣說法 爲世所恭敬 如六通羅漢
 是人懷惡心 常念世俗事 假名阿練若 好出我等過 而作如是言：“此諸比丘等
 爲貪利養故 說外道論議 自作此經典 誑惑世間人 爲求名聞故 分別於是經”
 常在大眾中 欲毀我等故 向國王大臣 婆羅門居士 及餘比丘衆 誹謗說我惡
 謂：“是邪見人 說外道論議” 我等敬佛故 悉忍是諸惡

この偈は、岩波本では次の様に訓読されている。

41) 竺法護『正法華經』、大正9, 106c29～107b8も参照。

或は阿練若に 納衣にて空閑に在りて 自ら真の道を行ずと謂いて 人間を輕賤する者あらん。

利養に貪著するが故に 白衣のために法を説きて 世のために恭敬せらるること 六通の羅漢の如くならん。

この人は悪心を懷き 常に世俗の事を念（おも）い 名を阿練若に仮りて 好んでわれ等の過を出し しかもかくの如き言を作さん 『この諸の比丘等は 利養を貪らんがための故に 外道の論議を説き 自らこの經典を作りて 世間の人を誑惑（たぶらか）し 名聞を求めんがための故に 分別してこの経を説くなり』と。

常に大衆の中に在りて われ等を毀（そし）らんと欲するが故に 国王・大臣 婆羅門・居士 及び余の比丘衆に向いて誹謗し、わが悪を説きて『是れ邪見の人なり 外道の論議を説くなり』と謂わんも われ等は、仏を敬いたてまつるが故に 悉くこの諸の悪を忍ばん。

1.4. 誰が誰を非難しているのか？

上に引用した偈頌は、後に述べるように、従来誤って解釈されていた。とくに、非難する者とされる者に関して、現代の訳者のみならず、中国の注釈家も混同しているが、これは上記の偈頌において引用記号（例えば、梵語 *iti*；漢語「曰」）が欠けていることに起因するとも考えられるが、より根本的な原因は、阿蘭若住比丘と村住比丘の対立が認識されていなかったからだと考えられる。

次の節では、様々な文献から窺えるこの二つのグループの敵対関係について見てみよう。

2. 阿蘭若住比丘と村住比丘の対立

2.1. *aranya*（“阿蘭若，郊外，荒野”）⁴²⁾ と *grāma*（“村”）

ヴェーダやブラーフマナの時代から一貫してインド文化では、*aranya*（郊外，荒野）と *grāma*（村）⁴³⁾ の対立が見られる。この点に関して、Olivelle は次の様に述べている。「……二つの宗教形態——ヴェーダの儀式尊重主義と苦行主義——は、二つの

42) 佐々木閑によれば、*aranya* とは、「町や村落を中心として周囲、半径1キロメートル程度の範囲の外部を指す。『森』という訳は不適當。『郊外』という概念に相当する」という（2003: 226, n. 1）。Karashima 2001: 149, n. 41 も参照。

43) Cf. Malmoud 1976; Olivelle 1990; Sprockhoff 1981, 1984.

場——すなわち村と荒野——で象徴される。」⁴⁴⁾

この対立は、以下に見るように、仏教においても見られるものである。

2.2. スリランカにおける阿蘭若住僧 (*Araññavāsī*) と村住僧 (*Gāmaṇvāsī*)

古代スリランカでは、三つの学派 (*nikāyas*) ——*Mahāvihāra*, *Abhayagiri* そして *Jetavana*——が存在したことが史書に記されている。Rahula に依れば⁴⁵⁾、これら学派の成立以前、紀元前一世紀後半の記録から、*Pāṃsukūlika* (“糞掃衣を着る者”) と *Dhammakathika* (“説法をする者”) という二つのグループがあったことが知られるという。前者は修行 (*paṭipatti*) が仏教の根本と主張し、後者は学習 (*pariyatti*) がもっと重要と主張した。彼らはそれぞれの主張を裏付ける論証を示して、論争を続け、最終的には *Dhammakathika* が勝った⁴⁶⁾。

注意を喚起しておきたいことは、彼らは、二つの異なった学派ではなく、同一の僧団に属しながらも、異なる見解と異なる生活様式をもつ二つのグループであるということである⁴⁷⁾。後に、上述の三つの学派——*Mahāvihāra*, *Abhayagiri*, *Jetavana*——が成立したとき、それぞれの学派内に *Pāṃsukūlika* が存在したことが知られている⁴⁸⁾。これに加えて、Rahula によれば、六世紀頃から、別の種類の対峙するグループが見られるようになるという。すなわち、*Araññavāsī* (Skt. *Āraṇyavāsin* “阿蘭若に住む者”; *Vanavāsī* “森の住者”とも呼ばれる) と *Gāmaṇvāsī* (Skt. *Grāmaṇvāsin* “村住者”) とが、異なる学派ではないが、異なるグループとして、パーリの史書に記載されている⁴⁹⁾。Rahula は、*Pāṃsukūlika* と *Araññavāsī*——どちらも頭陀行 (*dhutaṅga*) を実践していたという共通点をもつ——は異なる集団と見なされていたと述べているが⁵⁰⁾、*Dhammakathika* と *Gāmaṇvāsī* との関係については何も語っていない。

Rahula の研究から、スリランカでは古い時代から、大きく言って二種類のタイプの出家僧グループが存在したことが分かる。すなわち、頭陀行を実践しつつ村外の阿蘭若に住んだ僧たちと、町や村の中（あるいはそれらの近く）に住んだ僧たちとである。

44) “... the two religious paths, Vedic ritualism and asceticism, are symbolised by the places——village and wilderness.” (Olivelle 1990: 131).

45) Rahula 1956: 195.

46) Rahula 1956: 158–159.

47) Rahula 1956: 195.

48) Rahula 1956: 196.

49) Rahula 1956: 196.

50) Rahula 1956: 197.

2.3. ミャンマーにおける阿蘭若住僧 (*Araññavāsī*) と村住僧 (*Gāmaṇvāsī*) の対立

古代スリランカにおける、これら二つのグループがお互いにどのような態度で接したかは、Rahula の研究からは分からない。しかし、1861 年にミャンマーでパーリ語で書かれた史書 *Sāsanavaṃsa* は、ミャンマー僧伽 (*Maramma-saṃgha*) 内における、阿蘭若僧グループ (*araññavāsī*) と村住僧グループ (*gāmaṇvāsī*) との分裂と闘争を伝えている。

⁵¹⁾ 十三世紀に、Ujana という王が、七十七の僧院 (*vihāra*) を建て、それらの僧院を維持するために沢山の田地を寄付した。すると、この田地を巡って僧侶たちが争いを始めた。この争いを聞いて、教えに通曉している長老一人と修行熱心な二人の僧とが、僧院を離れ、山の中に住んだ。彼ら (とその弟子たち) は「一人で行ずる者」(*ekacāra*) と呼ばれるようになり、他方、僧院に残った僧たちは、「大勢で行ずる村住者」と呼ばれた。こうして阿蘭若住僧 (*araññavāsī*) と村住僧 (*gāmaṇvāsī*) の二つのグループが出現した。

⁵²⁾ もっと後、1698 年に *Guṇābhilaṃkāra* という阿蘭若住僧の長老が、沙弥たちに左肩だけを覆って村に入るように命じた——それは守旧派から見ると戒律に違反する行為であった——。その長老はさらに頭飾りに椰子の葉を使うこと——それはどうも村住僧の習慣だったようだ⁵³⁾——を禁止した。このことから、その長老のグループ——「一方の肩を覆う者たち」と呼ばれた——と守旧派——「肩をきちんと覆った者たち」と呼ばれた——との間の論争が始まった。前者の「一肩派」は、自分たちの作法を支持する仏典が見つからなかったので、ある在家者に賄賂を渡して、彼らの見解に合致した書籍 (*gandha = gantha*) を作らせた。村住僧の一群 (*gāmaṇvāsībhikkhugāṇa*) は、この書籍を壊し、「頭飾りをつけない不吉な者たちを仏教 (*sāsana*) から追い出せ」といって、それら阿蘭若住僧たちを追い払った。すると、他の村住比丘たちも武器を持って、そのとき僧院 (*vihāra*) に住んでいた阿蘭若住比丘を追い出した。このことを聞いた王は、「村住比丘と阿蘭若住比丘は共存すべし。前者は後者を苦しめてはならぬ」という勅旨を下し、その結果、この紛争はひとまず終結した。しかし、その後も「一肩派」と守旧派の論争は、1784 年に王によって裁定が下されるまで、続いたという。

我々は、ここにも阿蘭若住比丘と村住比丘の対立——それは武力攻撃にまで至って

51) *Sāsanavaṃsa* 83.10f. Cf. Law 1952: 91–92.

52) *Sāsanavaṃsa* 118.1f.; Law 1952: 123f. von Hinüber 1995: 39f. も参照。

53) Cf. *Sāsanavaṃsa* 116.27f.; Law 1952: 122.

いる——の一例を見ることができる。また、一方のグループが典籍を偽造し、もう片方がそれを壊したというのは注目に値する。

Sāsanavaṃsa は、本来村住比丘でその教えに従っていたが、後にそれを捨て阿蘭若住比丘になった長老についても言及している⁵⁴⁾。この記述から、比丘が途中で修行様式を変えることが可能だったことが分かる。

阿蘭若住比丘と村住比丘の対立はタイでも見られる⁵⁵⁾。

2.4. パーリ文献に見える阿蘭若住比丘 (*ārañṇaka*) と村住比丘 (*gāmantavihārī*)

パーリ聖典にも、阿蘭若住比丘 (*ārañṇaka*) と村住比丘 (*gāmantavihārī*)⁵⁶⁾ とが並記されている例がある。例えば、

Vin. III 171.-2f. *yo icchatī ārañṇako hotu, yo icchatī gāmantante viharatu, yo icchatī piṇḍapātiko hotu, yo icchatī nimantanam sādīyatu,* (“阿蘭若住者になりたい者はなれ；村に住みたいものは住め；托鉢者になりたい者はなれ，招待食を受けたいものは受けよ；……”)

MN I 30.-3f. *kiñcāpi so hoti ārañṇako pāṇāsenāsano, piṇḍapātiko sapadānacārī, paṃsukūliko lūkhacīvaradhāro, atha kho naṃ sabrahmacārī na sakkaronti kiñcāpi so hoti gāmantavihārī nemantaniko gahapaticīvaradhāro, atha kho naṃ sabrahmacārī sakkaronti...* (“たとえ彼が阿蘭若住者・遠く離れた臥坐処に住む者・托鉢者・一軒一軒巡って托鉢する者・糞掃衣を着た者・粗末な衣を着た者であろうとも，修行者仲間は彼を尊敬しない……。たとえ彼が村に住む者・招待食を受ける者・在家者[からもらった]衣を着る者であろうとも，修行者仲間は彼を尊敬する。”)。

MN I 473.1~3. *ārañṇakenāpi kho āvuso Moggallāna bhikkhunā ime dhammā samādāya vattitabbā, paṇḍita gāmantavihārīnā* (“Moggallāna 君よ。これらの事は阿蘭若住比丘も受持して実行すべきだ。まして村に住む[比丘]はいうまでもない。”)。

次の諸經典の記述は、阿蘭若住比丘と村住比丘の対立が早い時期からあったことを明確に示している。

Āṅguttara-Nikāya III 341f. には次のようにある。礼拝にくる在家者たちの喧噪を聞

54) *Sāsanavaṃsa* 116.27f.; Law 1952: 122.

55) 東南アジアにおけるこの対立の歴史については、Tambiah 1976, 1984 を参照。

56) *Visuddhimagga* (PTS ed., p. 71, l. -4f.) は *gāmanta* を次の様に定義している: *tattha saddhiṃ upacārena gāmo yeva gāmantasenāsana* (“村とその近郊が *gāmanta* 坐臥処である”)

いた仏は、侍者 Nāgita に、名声より閑居の樂を好むと語り、さらに次のように言った。「閑居・寂靜・正覺の樂を得ることのできない人は、不淨な樂、睡眠の樂にも似た利得・恭敬・名声の樂を享受すればよい」。そして村に住むことを次のように貶した (AN III 342.-1f.)。

“村に住む (*gāmantavihārī*) 比丘が三昧に入って坐っているのを見ると、私は「守園者か沙弥が邪魔して、彼を三昧から出させるのではないか」と考える。だから私は、彼が村に住むこと (*gāmantavihāra*) を喜ばない。

阿蘭若住の (*araññaka*) 比丘が阿蘭若の中で居眠りしながら坐っているのを見ると、私は「いまに彼は眠気と疲れを取って、阿蘭若 (*arañña*) を唯一の対象とした考察をするに違いない」と考える。だから、私は、彼が阿蘭若に住むこと (*arañnavihāra*) を喜ぶ。

あるいは、阿蘭若住の比丘が阿蘭若の中で、三昧に入らず坐っているのを見ると、私は「彼はいまに集中していない心を集中させ、集中した心を保つであろう」と考える。だから、私は、彼が阿蘭若に住むことを喜ぶ。

あるいは、阿蘭若住の比丘が阿蘭若の中で、三昧に入って坐っているのを見ると、私は「彼はいまに解脱していない心を解脱させ、解脱した心を保つであろう」と考える。だから、私は、彼が阿蘭若に住むことを喜ぶ。

あるいは、私は、村住の比丘が衣・飲食・坐臥具・薬・日常必需品を得るのを見る。彼は、利得・恭敬・名声を望み、独坐瞑想 (*paṭisallāna*) を捨て、阿蘭若と森 (*arañña-vanapatthāni*) を捨て、人里離れた住処 (*paṇṭāni senāsānāni*) を捨て、村・町・都に入って、そこに住まいを定める (*vāsaṃ kappeti*)。だから私は、彼が村に住むことを喜ばない。

あるいは、私は、阿蘭若住の比丘が衣・飲食・坐臥具・薬・日常必需品を得るのを見る。彼は、利得・恭敬・名声を避け、独坐瞑想を捨てず、阿蘭若と森を捨てず、人里離れた住処を捨てない。だから、私は、彼が阿蘭若に住むことを喜ぶ。”

同様の記述は、AN IV 343.23f. にも見られる。このように村住比丘の生活様式を貶している *Anguttara-Nikāya* は、阿蘭若住の比丘の立場に立っていると言える。

これに対して、*Saṃyutta-Nikāya* にある *Migajālana* という経 (SN IV 35.-4f.) は、村に住むことを支持している。*Migajāla* という比丘に、「一人でいる者」(*ekavihārī*) と「連れといる者」(*sadutiya-vihārī*) の意味を尋ねられた仏は次のように答えた。

“好ましく、快く、魅力的で、欲をかきたてる形・音・匂い・味・触感及び意識の対象があるが、もし比丘がそれらを楽しみ、歓迎し、執着すれば、彼に歓喜・貪着が起こり、その結果、彼は歓喜の繫縛に繋がれることになる。こうなった比丘が「連れという者」である。たとえ彼が、森の中の、人里離れ、閑静で、ざわめきなく、世間から離れ (*manussa-rāha-seyyaka*)、独坐瞑想 (*paṭisallāna*) に適した住処に住もうとも、彼は「連れという者」と呼ばれる。

他方、もし、比丘が、好ましい形・音・匂いなどを楽しまなければ、彼に歓喜・貪着は起こらず、歓喜の繫縛に繋がれることもない。このような比丘が「一人でいる者」であり、たとえ彼が、比丘・比丘尼・男女の在家信者たち・王・大臣・外道とその弟子たちに混じって村 (*gāmanta*) に住もうと、やはり「一人でいる者」と呼ばれる。”

上記のパーリ經典の記述から、阿蘭若住比丘と村住比丘の対立が早い時期からあったことが分かる。

2.5. *Abhisamācārikā-Dharmāḥ* に見える阿蘭若住比丘 (*āraṇyaka*) と村住比丘 (*grāmāntika*) の対立

大衆部説出世間部の律文献 *Abhisamācārikā-Dharmāḥ* にも、この二つのグループの対立を伝える記述がある⁵⁷⁾。

この梵語律典には、阿蘭若住比丘と村住比丘が食事をとるときの規程を扱っている一章がある⁵⁸⁾。それによれば、この二つのグループの比丘たちが一緒に食事をする (*ekabhaktatarppaṇa*) 際に仲違いをするのを見た仏は、次のような規程を定めた。すなわち、(1) 阿蘭若住比丘の僧院 (*āraṇyaka-vihāra*~; *āraṇyaka-seyyāsana*~) においてであれ、村住比丘の僧院 (*grāmāntika-vihāra*~; *grāmāntika-seyyāsana*~) においてであれ、両方のグループが一緒に食事をする場合、そこに住んでいる比丘たちは、一方のグループの比丘たちがやってくるのを最後まで待つべきであり、もし姿を現さない時

57) この文献の写真版は1996年に北京で出版された: *The Facsimile Edition of the Abhisamācārikā-Dharma of the Mahāsāṃghika-Lokottaravādin* 大衆部説出世部律・比丘威儀法梵文寫本影印版, Beijing 1996 (民族出版社) (中國民族圖書館原藏梵文貝葉寫本叢書)。ローマ字本も出版された: *A Guide to the Facsimile Edition of the Abhisamācārikā-Dharma of the Mahāsāṃghika-Lokottaravādin*, ed. Abhisamācārikā-Dharma Study Group, the Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taishō University, Tokyo 1998; “Transcription of the Abhisamācārikā-Dharma, Chapter V-VII” ed. Abhisamācārikā-Dharma Study Group, 『大正大學綜合研究所年報』, vol. 21, 1999, 234(1)-156(79).

58) Facsimile edition 30B5f.; Jinananda 1969: 140.2ff.; cf. Prasad 1984: 146f.

も食事を残しておいてやるべきである。(2) 在家信者が僧伽全員を食事に招待し、村住比丘たちに阿蘭若住比丘たちにも告げるように頼んだ時は、村住比丘たちはそのように告げ、阿蘭若住比丘たちは時間通りにその場に行くべきである。(3) 誰かが村住比丘たちを食事に招待した場合、彼らは招待者に阿蘭若住比丘たちも招待するように頼むべきである。等々。

仏は、さらに、これら二つのグループが互いに誹るのではなく、互いに讃え合うべきだと言った。

“さて、阿蘭若住比丘たちは村住比丘たちを、「君たちは多忙だ。君たちは忙しい。(なぜなら)君たちは舌の先でもっとも美味しい物を探しているから」と誹ってはならない。むしろ次の様に言って彼らを喜ばすべきだ。「尊者よ、あなた方は良いことをなさる。あなた方は重荷を背負っておられる。法を説き、僧院をきちんと維持し、香を焚き、在家に信心を抱かせる」。このように喜ばすべきだ。”⁵⁹⁾

“さて、村住比丘たちは、阿蘭若住比丘たちに対し「君たちは名声を得ようと思って(?)空屋に住んでいる。(しかし)ジャッカも阿蘭若(*āranya*)に棲んでいるではないか。君たちは(そこに)日がな一日坐って法臙を重ねている(だけだ)」と罵ってはならない。むしろ次のように語りなさい。「人里離れ、孤立し、無人で(*vigata-janapada*)、人々の目につかない(*manuṣya-raha-sāyaka*)、独坐瞑想到に適した阿蘭若中の住処(*āranyaka~śeṣyāsana*)に住むのは容易ではない。一晚あるいはそれ以上、一人静かに精神あるいは自我を制御して(そこに住むのは)、難しくまた心地悪しきこと」。(さらに)「尊者よ、あなた方は良いことをなさる。阿蘭若中の住処をきちんと維持している。世尊は『比丘たちが阿蘭若中の住処に住むかぎり、善法の衰えどころか増大のみが期待される』と仰った。しかも、あなた方は、悪魔に、真実の法を消失し惑わす機会を与えない」と。このように喜ばせて、立ち去りなさい。”⁶⁰⁾

59) *Abhisamācārikā-Dharmāḥ* 31B5. *nāpi dāni āraṇyakehi grāmāntikā kutsetavyā, “bahukṛtyā bahukaraṇīyā jhvaḍgre <na> yūyam rasāgrāni paryesatha”. | atha khalu samrādhayitavyā, | vaktavyam, “āyuṣman”, sobhanam (read: śobh) kriyati, bahukarā yūyam bhāram vahatha. | dharmmadeśanām karetha. | saṃghārāmo kelāpiyati, | dhūmo kriyati, kulāni prasādiyanti” ti. | evaṃ samrādhayitavyāḥ |.* 対応する『摩訶僧祇律』には「阿練若比丘不應輕聚落中比丘言：“汝(v.l. 如汝)必利舌頭、少味(「尖味」の誤り? 「味に対して鋭敏」?), 而在此住。”應讚：“汝聚落中住、說法教化。爲法作護、覆蔭(v.l. 陰)我等。”(大正22, 510a23f.)とある。

上の記述から、同一の僧団の中で、阿蘭若住比丘たちと村住比丘たちとが対立していたことが分かる。

2.6. 大乘仏典における阿蘭若住比丘と村住比丘との対立

2.6.1. *Śikṣāsamuccaya* : 阿蘭若住を称賛

Ray (1994: 251f.)・望月 (1988)・Silk (1994) などが明示したように、いくつかの初期大乘仏典は阿蘭若住を称賛している。

例えば、七〜八世紀の Śāntideva の作とされる *Śikṣāsamuccaya* (大乘集菩薩学論) の第 11 章, *Aranyasamvarṇana* (“阿蘭若住の称賛”) には、様々な大乘仏典に見える阿蘭若住を称賛する文章が引用されている⁶¹⁾。

2.6.2. *Ugraparipṛcchā Sūtra* (郁伽長者所問經) : 阿蘭若住比丘を称賛

そのような初期大乘仏典の一つ *Ugraparipṛcchā Sūtra* (郁伽長者所問經) は、菩薩が覺りを得るためには阿蘭若に入る必要があると述べている。

“家にいる菩薩は、無上の正しい覺りを正しく得ることは決してできない。彼らはみな在家生活を離れ、阿蘭若 (*ḍḍon pa*) を思い、阿蘭若に心を向け、阿蘭若に至ってこそ、無上の正しい覺りを得る。かの菩薩の集まり (*tshogs*) はこのようにして形成されたのだ。”⁶²⁾

十二頭陀行が詳しく説明される別の箇所では、阿蘭若に住むことがその頭陀行として勧められている。

60) *Abhisamācārikā-Dharmāḥ* 32A6f. *nāpi dāni grāmāntikehi āraṇyakā kutsetavyā | paṃsetavyā* (MS. *yaṃ* °), | *“sūnyāgāragatā* (MS. *°āgāranātā*) *yūyam prajñā*(32A7)*vaitakṣiyā* (a corruption?) *śṛgālāpi āraṇye vasanti. divasaṃ yūyam varṣāni piṇḍentā āsatha . | atha khalu vaktavyā, “durāvāsakāni āraṇyakāni śeṣyāsānāni prāntāni* (MS. *prāptāni*) *viviktāni vigatajanapadāni manuṣyarahasāyyakāni pratisamlayanasāropyāni, duṣkaram pravivekena* (MS. *prativekena*) *durabhiramaṃ ekaṃ paraṃ rātri vinayamāno mānasam ādhyātmanam vē” ti. | “āyusman*{a}, *śobhanam kriyati, āraṇyakam śeṣyā*-(32B1) *sanam kelāpīyati, | uktaṃ cēdaṃ bhagavatā »yāvakiyaṃ ca bhikṣavo āraṇyakāni śeṣyāsānāni adhyāvasiṣyatha, | tāva vṛddhi yeva pratikāṃkṣitavyā | kuśalehi dharmmehi no parihāni.*“ *na ca vo mārāḥ | pāpīyaṃ avatāram adhigamiṣyati | saddharmmasya antarddhānāya sa <m>mohāya.*” *tti* (MS. *nti*) | *evaṃ samrādhīya* (MS. *samrāviya*) *gantavyaṃ* |. 対応する『摩訶僧祇律』には「聚落比丘不應輕阿練若言：「汝在阿練若處住，希望名利。羴鹿・禽獸亦在阿練若處住。汝在阿練若處，從朝竟日，正可數歲（*u.l.* 數歲耳），數月耳。」應讚言：「汝遠聚落，在阿練若處，閑靜思惟，上業所崇。此是難行之處，能（しかし＝「乃」）於此住而息心意。」（510a25f.）とある。

61) この章に関しては、Ray の分析を参照 (1994: 252-254)。

62) D(T), vol. 9, p. 324, 541.7f.; Q, vol. 23, p. 265, 313b8f.

“出家の菩薩は十の功德を見て、命ある限り、阿蘭若に住むことをやめるべきでない。”⁶³⁾

この經典は、阿蘭若住比丘が時々村住比丘たちを訪ね、彼らの僧院で学習のために滞在することも伝えている。

“居士よ、もし阿蘭若に住む菩薩が、法を聞くため、先生 (*ācārya*) や教師 (*upādhyāya*) に会うため、あるいは病人を訪ねるために村の住処 (*grāmāntika śayanāsana*) に来ても、彼は、夕方には戻り帰るよう心懸けるべきだ。もし彼が（仏の教えの）解説や読誦を他の人に依頼して、僧院 (*vihāra*) に留まるときも、心を阿蘭若に向けておくべきだ。あらゆる物（見るにつけ）阿蘭若を思い、法を求めて已まないことこそ、（真の）阿蘭若住 (*aranyavāsa*) なのだ。”⁶⁴⁾

“出家の菩薩が解説や読誦を（受ける）ために、僧衆 (*gaṇa*) の中に入る時は、彼らに尊敬の念をもち、先生・教師・長老・中位の（法臘の）者・出家したばかりの者を尊敬すべきである。”⁶⁵⁾

阿蘭若住比丘は阿蘭若の中で六波羅蜜を修めるとも言われる⁶⁶⁾。阿蘭若に住んで他の行や六波羅蜜を修め“善根を確立したら (*upastabdha-kuśalamūla*)、村・町・市場町 (*nigama*)・王国・首都に入って、法を説くべきである”⁶⁷⁾ という。

このように、この經典では、阿蘭若に独り住み、もっぱら六波羅蜜を修め、三昧を行ずる者こそが出家の「菩薩」であると説いている。

2.6.3. *Rāṣṭrapālāparipṛcchā Sūtra*（護国尊者所問經）に見える阿蘭若住比丘と僧院比丘の対立

Śikṣāsamuccaya には阿蘭若住を讃える經典として *Rāṣṭrapālāparipṛcchā Sūtra*（護国尊者所問經）も引用されている。

この經典では⁶⁸⁾、さとりを求める者は山の中、阿蘭若 (*aranya*) あるいは洞窟に住

63) D(T), vol. 9, p. 326, 555.5.; Q, vol. 23, p. 269, 322b2f.

64) Śikṣ.200.7f.; *Ugraparipṛcchā Sūtra* の蔵訳を参照 : D(T), vol. 9, p. 326, 556.1f.; Q, vol. 23, p. 269, 322b7f.

65) Śikṣ.199.15f.; cf. D(T), vol. 9, p. 327, 565.2f.; Q, vol. 23, p. 271, 328a2f.

66) D(T), vol. 9, p. 327, 562.7f.; Q, vol. 23, p. 270, 326b5f.

67) Śikṣ.199.14f.; cf. D(T), vol. 9, p. 327, 565.1f.; Q, vol. 23, p. 271, 328a1f.

68) Ray (1994: 260f.) は、この經典に見える阿蘭若住の菩薩に関する記述を集めて、要約している。

むべしという⁶⁹⁾。菩薩たちはこのように家を捨て阿蘭若に住み、そこでの生活に喜びを見出すという⁷⁰⁾。彼らは女性や男たちともつきあわず、犀のように独りで住むという⁷¹⁾。彼らは何でも手に入る物に満足し、何も貯えないことは鳥のようで、また世界のどこにも定住の家がない⁷²⁾。彼らは利得や尊敬 (*lābha-satkāra*)・良家の人々との交際 (*kula-saṃstava*) に対して無関心である⁷³⁾。仏の智慧を求める彼らは、施与 (*dāna*) と自己制御 (*dama*) を実践する；彼らは禅定 (*dhyāna*) と精進の徳 (*vīryaguṇa*) を完成している⁷⁴⁾。六波羅蜜の実践は、仏になる要件の一つと言われる⁷⁵⁾。菩薩は空性 (*śūnyatā*) と無相 (*ānimitta*) を了解して、心の平静 (*sama*) と自己制御 (*dama*) を楽しむという⁷⁶⁾。仏は、その過去世において、所有する物は言うに及ばず、肉・皮・髓・血・体のあらゆる部分を施与することで布施行を実践し、また持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の行も実践したという⁷⁷⁾。要するに、彼は六波羅蜜を実践した。さらに菩薩であった彼は常に頭陀行を実践したという⁷⁸⁾。

従って、この経によれば、真の菩薩は、阿蘭若に独りで住み、俗人とは交わらず、主として頭陀行・六波羅蜜・禅定を実践している者である。彼らは人々に説法はしない。「彼らは説法僧 (*dharmabhāṇaka*) たちが口ごもるのを期待したりはしない」⁷⁹⁾ という表現は、Ray が指摘している様に (1994: 263), 彼らが「説法僧」ではなかったことを示している。要するに *Rāṣṭrapālāpariprcchā Sūtra* では、理想的な菩薩は阿蘭若住比丘とされているのである。

この経典は、彼らには敵対者がいたことも伝えている。悪比丘たちは、忍耐力をもって修行している彼らを杖で打って僧院から追い出すという⁸⁰⁾。これら悪比丘たちは、美食・鉢・衣にうつつを抜かし、いつも良家の者たちと親しくなろうと努めているという⁸¹⁾。利得を望んで良家の人々との付き合い・関係に専念しているともいう⁸²⁾。

この経典は、末法の時代の悪しき比丘たちの行状も描いている (RP28.17ff.)。彼ら

69) RP. 59.7 (Ensink 58).

70) RP. 13.5 (Ensink 14); RP. 14.5 (Ensink 15). Cf. Ray 1994: 261.

71) RP. 13.6–7 (Ensink 14).

72) RP. 16.5–6 (Ensink 17).

73) RP. 12.17–13.1 (Ensink 14).

74) RP. 13.10–11 (Ensink 14).

75) RP. 21.7 (Ensink 21).

76) RP. 16.13–14 (Ensink 17).

77) RP. 27.13–15 (Ensink 27–28).

78) RP. 27.18 (Ensink 28).

79) RP. 15.11–12 (Ensink 16).

80) RP. 18.8 (Ensink 19).

81) RP. 19.10 (Ensink 21).

82) RP. 21.1 (Ensink 21).

は、手に仏の幢を持ち、在家の人々に奉仕するという。また教えがもたらす多くの徳を捨て、彼らは常に書物 (*lekha*) を持ち運んでいるという⁸³⁾。彼らは酒と高慢に酔いしれて、村の家々を (*grāmakuleṣu*) 訪ね回る⁸⁴⁾。「快楽に耽ってはならない」と彼らは常に在家の人々に言いながら、自分自身は自制せず、彼らの弟子もまた自制しない。彼らは食べ物と性行為について語りつつ日夜を過ごす⁸⁵⁾。森 (*vana*) の中に住んでいようとも、心は村に留まっている⁸⁶⁾。彼らは、禅定と学習 (*adhyayana*) を捨て、放縦な弟子たちに囲まれ、住居を渴望して、常に僧院の経営 (*vihāraḥkarman*) に勤しむ。彼らは、「私は僧院の下働きではない。これは私のために建てられたのだ。私の言うことを聞く比丘だけ、この僧院に留まれる。」と言う。彼らは、戒行と徳を備え、自制に勤しむ比丘たちに対して冷たくこう言う：「この部屋 (*layana*) は、私のものと指定されている。これは私の内弟子に、それは私の親しい者に割り当てられている。立ち去れ。ここには汝の住む場はない。寝所・寝具 (*śayyāsana*) はすっかり配分され、多くの比丘がここに止宿している。しかもここでは何も手に入らない。ここで何を食べるつもりか。立ち去れ、比丘よ。」と。彼らは寝所・寝具を配分しないが、在家者のように物を貯え、多くの調度と召使いを所有している。このように冷遇され、侮辱されて真の菩薩たちは村や都会を去って阿蘭若に住むという⁸⁷⁾。

要するに、この經典では、村の中あるいはその周辺の僧院に住み、在家者と交際し、説法をする比丘たちが、阿蘭若住菩薩の敵対者として描かれている。また、寝所・寝具を配分するという記述から判断して、これら村住比丘も阿蘭若住菩薩も同じ僧団に属していたと考えられる。

2.6.4. 『諸法無行經』における頭陀行比丘と村志向比丘の対立

最近、*Sarvadharmāpravṛttinirdeśasūtra* (鳩摩羅什訳『諸法無行經』, 大正第15巻所収) の梵語断簡がアフガニスタンで出土し、現在、ノルウェーの Schøyen Collection に所蔵されている。Jens Braarvig 博士は、この断簡をチベット訳・漢訳と対照し、また英訳を付して出版した (Braarvig 2000: 81-166)。中期大乘經典類に属すと考えられるこの經典は、頭陀行比丘と村志向比丘の間の興味深い対立を伝えている。

この対立は、Braarvig 博士の章立てに従えば §6 と §12 にある二つの物語に見られ

83) RP. 29.3-4 (Ensink 28-29).

84) RP. 29.2 (Ensink 28).

85) RP. 29.15-30.2 (Ensink 29).

86) RP. 30.13 (Ensink 30).

87) RP. 31.1-18 (Ensink 30).

る。最初の話 (pp. 125-131) は、頭陀行者 Cāritramati と Viśuddhacāritra という説法僧 (dharmabhāṇaka) に関するものである。

かつて Cāritramati という僧がいた。彼は苦行を奉じ (*lūhādhimukta*)、清浄なる戒を保ち、世俗的な五神通を有し、律蔵に精通し、厳しい苦行の行者 (*ugra-tapas*) であった。彼は僧院 (*vihāra*) を造り、そこで瞑想を行じながら住んでいた。

ある時、その僧院へ、説法僧 Viśuddhacāritra が弟子たちを連れて訪れ、そこに滞在した。彼らは、その僧院から里へ出かけ、人々への慈悲心から、里で食事をするのだった。こうして彼らは数多くの人々を教化し菩提心を起こさせた。他方、Cāritramati とその弟子は禅定を好み、滅多に人里には出向かなかった。

Cāritramati は Viśuddhacāritra たちの行動を嫌悪し、皆を集めて、僧院に住む僧が村に入るのを禁じると共に、Viśuddhacāritra たちに対して、正しい行いを知らず話しが多すぎると非難した。また仏は阿蘭若での生活を讃えたと語り、皆に村に行かず禅定を修めるよう命じた。

三ヶ月の自恣を終えて後、Viśuddhacāritra とその弟子たちは、他の僧院へ移り、そこから再び村・町・都へ法を説きに出かけた。Viśuddhacāritra の行いを知った Cāritramati は、「Viśuddhacāritra は悪しき行い・間違った行いをしている。どうして悟りを得られようか。彼は悟りから遠く離れている。俗人の許にいる (*'du 'dzir gnas gnas pa*)」と非難した。

この悪行の報いで Cāritramati は無間地獄に堕ちた。

二つ目の話は、Jayamati という頭陀行者と *Pramuditendriya という説法僧に関する話である (pp. 158-164; pp. 84-85 も参照)。なお、この話は、漢訳・藏訳のみに見え、対応する梵語断簡はまだ見つかっていない。

かつて *Pramuditendriya (喜根) という説法僧がいた。彼は、少欲知足や世俗から離れて独住することを説かず、むしろ諸法は貪欲・怒り・無知を本質としていること、従ってこれら三つは障礙ではないことを説き、また一切の行は一つの相を持つと説いた。

そのころ、Jayamati (勝意) という説法僧がいた。彼は、禁戒を守り、四禅・四無色定を修め、十二頭陀行を行っていた。ある日、勝意法師は托鉢していて、誤って喜根法師の在家信者の家に入り、座に坐って、少欲知足や世俗から離れて独住す

ることを賛嘆するとともに喜根法師を貶した。この信者は賢く、逆に貪欲とは何かと法師に尋ねた。法師が貪欲は煩惱だと答えると、信者は、では貪欲はどこにあり、どこから来て、どこへ行くのかと尋ねた。法師が貪欲はどこにあるのでもなく、どこから来て、どこかへ行くものではないと答えると、信者は、貪欲はどこにあるのでもないから、煩惱だとか清浄だとか言えないとやりこめた。勝意法師は怒って、「誤った説法で衆生を惑わしている」と喜根法師を罵って、その信者の家から出ていった。

阿蘭若に戻ると、誤った説法をしているとして喜根法師を比丘たちの前で非難した。すると喜根法師は長い偈を唱えて法を説いた。彼のこの説法を聞いた多くの神々は無生法忍を得、一万八千の比丘たちは漏尽解脱を得た。一方、勝意法師は大地獄に堕ちた。

喜根法師が唱えた偈の中に、次のような阿蘭若住比丘の行を批判した表現がある

「阿蘭若の住まい (*dgon pa'i gnas*) を思って、自分を讃えて他人を軽蔑し、阿蘭若への邪見にとらわれた者には生天はおろか覺りなどありえない。」⁸⁸⁾

「五欲に執着した在家者であろうとも、この法を聞いて恐れなければ、この教えに出家しながら、認識に関する謬見を持ち、頭陀の功德を自慢する者よりも優れている」⁸⁹⁾

上記の二つの物語から、次のことが分かる

- (1) 阿蘭若住比丘も阿蘭若に僧院を造った
- (2) 阿蘭若 (の僧院) に住みながら、村に入って人々に説法する説法僧がいた
- (3) 次々と僧院を遍歴する説法僧がいた
- (4) 阿蘭若で瞑想を実践する頭陀比丘と村に入って説法する比丘との間には感情的

88) *gañ zhig dgon pa'i gnas la rtog byed cin || bdag la stod byed gzhan la smod byed pa || dgon par lta la rab gnas de la ni || mtho ris med na byaṅ chub ga la yod | 7 |* (Braarvig 2000: 160); 鳩摩羅什訳『諸法無行經』, 大正 15 卷, 760a1f. 但自安住立 有所得見中 若住空閑處 自貴而賤人 尚不得生天 何況於菩提? 皆由著空閑 住於邪見故; 闍那崛多訳『諸法本無經』, 大正 15 卷, 761b28f. 若住蘭拏 (*[a]raṇya*) 分別已 高貴自我而欺他 彼無菩提無佛法 但自安住蘭拏見。

89) *chos 'di thos sin mi dñan gañ gyur pa'i || 'dod pa'i yon tan lña chags khyim pa'an bla'i || bstan pa 'di la rab tu byuñ gyur cin || dmigs lta sbyaṅs pa'i yon tan rlom pa min | 41 |* (Braarvig 2000: 163). 『諸法無行經』, 761a1f. 雖白衣受欲 聞是法不畏 勝於頭陀者 住在有見中; 『諸法本無經』, 大正 15 卷, 763b5f. 雖在勝家喜欲樂 而聞法已不驚怖 不於此教出家已 頭多自高有見得。

対立があった。

- (5) 二つ目の物語からは、伝統的比丘と大乘の比丘が、反目しつつも同じ僧院に一緒に住んでいたことも分かる

このように、頭陀行僧は、同じく阿蘭若に住みながらも村での説法に心が向いている僧に対して反感をもっている。従って、この経に描かれた対立は、*Ugraparipṛcchā* や *Rāṣṭrapālaparipṛcchā* に見える対立とはやや異なる。この経の記述は、いわゆる大乘仏教が僧院内外で力を得つつあった状況を反映していると思われる。また、この経が、頭陀行を軽蔑する人々によって作られたものであることは明らかだ。この経に描かれているように、村には住んでいないが、説法など村での活動に心が向いている僧を、ここでは便宜的に「村志向比丘」と呼ぶことにする。

2.6.5. 大乘仏典における阿蘭若住比丘と村住（村志向）比丘の対立

§ 2.6.2 と § 2.6.3 から、*Ugraparipṛcchā* と *Rāṣṭrapālaparipṛcchā Sūtra* を作ったのは、阿蘭若住比丘か、あるいは少なくとも彼らの同調者と推定される。この二つの經典以外にも、『迦葉品』(*Kāśyapa-parivarta*) と『宝積経』(*Ratnarāṣi*) とは、いずれも頭陀行や苦行を讃え、阿蘭若に住むことを勧めているから、やはり阿蘭若住比丘の立場から作られた經典であることは明らかである。

これら「阿蘭若住比丘の經典」では、村の中あるいは周辺の僧院に住んで在家者と交際のある比丘たちに対する反感が読みとれる。この阿蘭若住比丘と村住比丘とは、住んでいる場所が異なるのみならず、宗教行為の面でも対立している。阿蘭若住比丘たちは主として瞑想と頭陀行を専らにするが、村住比丘たちは在家者と交際し、説法し、また僧院を管理している。両者の対立と反感は、すでに見た *Abhisamācārikā-Dharmāḥ* に描かれたそれらと基本的に軌を一にする。

他方、『諸法無行経』(*Sarvadharmāpravyṭtinirdeśa Sūtra*) では、対立する二つのグループ、すなわち頭陀行比丘と「村志向比丘」とは、同じ阿蘭若中の僧院に住んでいる（後者は長期に滞在しないようだが）。従って、阿蘭若住比丘 vs 村住比丘という単純な対立はこの經典の場合は当てはまらない。しかし、彼らの宗教行為——一方は頭陀と瞑想、他方は在家者の教化と説法——に焦点を当てれば、この二つのグループの対立構造は、阿蘭若住比丘 vs 村住比丘という対立と軌を一にする。

3. 再び「勸持品」の偈

以上の考察を踏まえて、再び『法華経』「勸持品」の偈を読んでみよう。梵本には引用符号がないので、引用文（誹謗の言葉）と平叙文を区別するのはなかなか難しく、現代の学者たちのみならず漢訳・チベット語訳の訳者たちの解釈もこの点で混乱している。もし、上に見てきた阿蘭若住比丘 vs 村住（あるいは村志向）比丘の対立関係を考慮に入れ、同時に、この偈で使われている動詞の相の違い——アオリスト形 (*deṣayī*, *deṣayuh*, *cārayī*) は、願望法 (optative) 的意味で用いられ、おそらく引用文を示し、他方、未来形は平叙文を示す——に注目すれば、問題の第5～11偈は以下の様に訳せよう。

阿蘭若に住んで⁹⁰⁾、襤褸を着た、愚かな苦行者たちが⁹¹⁾、私たちのことを (*asme*)
こう言うでしょう⁹²⁾：(第5偈)

「彼らは味 (*rasa*) を貪り執着し、在家者たちに法を説く (*deṣayī*)」と。(第6偈 ab)

⁹³⁾ 彼ら (= 阿蘭若比丘たち) は六神通を持つ者 (*ṣaḍabhiñña*)⁹⁴⁾ のように敬われる。
(第6偈 cd)

彼らは (実は) 怖ろしい心をもち、邪悪で、家に心はとりこになっている⁹⁵⁾。(第7偈 ab)

我々を罵る者たちは、阿蘭若の隠處に入って (第7偈 cd)、利益と名誉にとらわ

90) *aranyavṛttaka*-. ネパール及び Gilgit 写本は *aranyacintaka*- (“阿蘭若 [での生活] を考えつつ”)。

91) O. *saṃlekha-caritā* (= F); D2. *saṃlekha-vṛtta-cāri*.

92) *asme evaṃ vakṣyanti* (= O); F. *asmai evaṃ vakṣyanti*; D2. (')*sma evaṃ vakṣyanti*. 所謂 Kashgar 本 (略号 O) には、しばしば、*asme* という語形が、一人称複数の主格及び対格として現れる。例えば、KN.147.10. *asmo* / O. *asme* / K'. *asmai* (主格); KN.190.12. *asmām* / O. *asme* (対格)。F 本の *asmai* は、*asme* を過剰に梵語化した形 (hypersanskritism) と思われる。D2 の *asma* (対格・複数形。語頭の母音 a が連声で脱落している) については、BHSG § 20.45 を参照。*asme* (或いは *asma*) *evaṃ vakṣyanti* という句は、第8偈の *asmākaṃ caiva* (Bj, D2. *asmāṃś ca evaṃ*) *vakṣyanti* に似ている。この第5偈の *asme evaṃ vakṣyanti durmatī* は第12偈の *ye cāsmān kutsayisanti durmatī* にも似ている。これらのことから、この偈の *asme* (或いは *asma*) は、主格ではなく (チベット訳や近現代の訳者は主格で解釈している)、対格と判断される。

93) 第6偈 cd と第7偈 ab も「私たち」に向けられた誹謗内容である可能性も捨てきれない。

94) 六神通を持つ者とは、僧の中で最高の境地に到達したものである。Vin II 161.8f. *khattiyakulā pabbajito ... brāhmaṇakulā pabbajito ... gahapatikulā pabbajito ... suttantiko ... vinayadharo dhammakathiko paṭhamassa jhānassa lābhī dutiyassa jhānassa lābhī tatiyassa jhānassa lābhī catutthassa jhānassa lābhī sotāpanno sakadāgāmi anāgāmi ... arahā tevijjo chalaḍbhijño* (= *ṣaḍabhiñña*) とあるのを参考。

95) *grha-cintā-vicintakāḥ*. もし *grha-vittā-vicintakāḥ* (注10参照) なら、“家と財産ばかりを考えている”。

れ、私たちのことをこう (*eva[m]*)⁹⁶⁾ 言うでしょう⁹⁷⁾：(第8偈 ab)

「実に、この比丘たちは外道だ！彼らは自分たちの詩 (*kāvyāni*) を説く (*deśayuh*) !
(第8偈 cd)

利益と名誉のために、彼らは自分で經典 (*sūtrāni*) を作って、集会 (*parṣā*) の中で説く」と。(第9偈 abc)

私たちを罵る者は、(第9偈 d)⁹⁸⁾ 王たち・王子たち・大臣たち・バラモンたち・居士たち、さらに他の比丘たちにも (第10偈)、私たちの悪口を言うでしょう。「彼らは外道の教義を広めている」と (第11偈 ab)

私たちは偉大な聖仙たち (= 仏たち) への尊敬の念から、これら全てを耐えましょう。(第11偈 cd)

羅什訳も同様に解釈できる。

或有阿練若 納衣在空閑 自謂行眞道 輕賤人間者：“貪著利養故 與白衣說法”
爲世所恭敬 如六通羅漢 是人懷惡心 常念世俗事
假名阿練若 好出我等過 而作如是言：“此諸比丘等 爲貪利養故 說外道論議
自作此經典 誑惑世間人 爲求名聞故 分別於是經”
常在大衆中 欲毀我等故 向國王大臣 婆羅門居士 及餘比丘衆 誹謗說我惡
謂：“是邪見人 說外道論議” 我等敬佛故 悉忍是諸惡⁹⁹⁾

チベット訳は 6 ab に関して筆者と解釈が異なる¹⁰⁰⁾。

著者の解釈にも、引用文 (誹謗) と平叙文の区別に関して、まだ不確定な点が残っていることは認めざるを得ないが、それでも、これら偈から、以下の点に分かる。

96) 注 (12) 参照。

97) *asmākaṃ caiva vakṣyanti lābha-satkāra-niśritāḥ*. あるいは、“私たちのことをこう言う「(彼らは) 利益と名誉にとらわれている。」と”。この解釈は、蔵訳者の解釈と一致する：*bdag cag la ni 'di skad mchi "rnyed dang bkur sti gnas pa ste, dge slong 'di dag mu stegs can, bdag gi rang bzo rab tu 'chad"*。

98) 蔵訳の第9偈は以下の通り：*rnyed pa dang ni bkur sti'i phyir / rang gis mdo sde byas nas su // 'khor gyi dbus su 'chad byed ces / bdag cag rnams la shin tu 'phyi* // (「利益と名誉のために、自分で經典を作って、集会の中で説く」と私たちを強く罵る)。筆者は、この偈に関して、蔵訳者の解釈に同意する。しかし、この偈が阿蘭若住比丘が発した「私たち」に対する罵りの言葉ではなく、他ならぬ阿蘭若住比丘に関する記述の可能性も捨てきれない。その場合、第8, 9偈は次のように訳されよう：“(阿蘭若住比丘たちは私たちについて言う：)「実に、この比丘たちは外道だ！彼らは自分たちの詩を説く。」と。(しかし) 私たちを罵る者たち (こそ)、利益と名誉のために、自分で經典を作って、集会の中で説く。”

- (1) 阿蘭若住比丘¹⁰¹⁾が「私たち」を非難 (第5偈～6偈 ab ; 第7偈 cd)
- (2) 阿蘭若住比丘は愚か (*durmati*) (第5偈 d)
- (3) 「私たち」は在家者に説法したことで非難される (第6偈 b ; 第8偈 cd ; おそらく第9偈 c も)

99) “あるいは阿練若 (比丘) で納衣をきて、空閑処にいて、自分では真の道を行じていると思ひこみ、世間にいる *者 (比丘) たちを「利養に貪着して、在家者のために法を説く」と軽蔑する者がいる。

(彼ら阿蘭若比丘は) 世間の人々から六通羅漢のように敬われる。(しかし) 彼らは悪い心をもっていて、いつも世俗の事を考えている。

阿練若 (比丘) という名声を使い、いつも私たちの欠点を探し出しては、こういう: 「これら比丘たちは、利養が欲しくて、外道の論を説き、自分でこの經典を作って、世間の人を惑わし、名声を得るためにこの経を解説する」と。

いつも大衆の中で私たちの名前を貶めようと、国王・大臣・婆羅門・居士、さらに他の比丘たちに、私たちの悪口を言う: 「彼らは邪見の者で、外道の説を説いている」と。私たちは仏を尊敬しているので、これらの悪事を堪え忍ぼう。”

* 「人間」は、漢語では古も今も「人々の間、世間」の意味である。現代の訳者の多くが「にんげん」とするが、それは日本語に引きずられた誤解である。

100) Nakamura 1986: 272.3-273.4:

dgon pa dag la rab sems shing tshim (v.l. tshem) bu dag kyang bgos nas ni /
yo byad bsnnyungs tshul spyod do zhes blo ngan de skad smra bar 'gyur // (第5偈)

ro bro chags shing zhen pa rnams khyim pa dag la chos kyang 'chad /
mngon shes drug can ji bzhin du bsti stang dag kyang bgyid par 'gyur // (第6偈)

gtum pa 'i sems dang sdang sems ldan khyim dang nor la mam par sems /
dgon pa dben par rab zhugs te bdag cag rnams la skur pa 'debs // (第7偈)

bdag cag la ni 'di skad mchi rnyed dang bkur sti gnas pa ste /
dge slong 'di dag mu stegs can bdag gi rang bzo rab tu 'chad // (第8偈)

rnyed pa dang ni bkur (v.l. bskur) sti 'i phyir rang gis mdo sde byas nas su /
'khor gyi dbus su 'chad byed ces bdag cag rnams la shin du (v.l. tu) 'phya // (第9偈)

rgyal po dang ni rgyal bu dang de bzhin rgyal po 'i blon po dang /
bram ze dang ni khyim bdag dang dge slong gzhan dag drung du ni // (第10偈)

bdag (v.l. dag) cag rnams la mi bsnags brjod mu stegs can zhes tshig kyang brjod /
drang srong che la gus pas na thams cad bdag cag bzod par bgyi // (第11偈)

これらの偈は、次のように訳せよう。

“阿蘭若のことを考えつつ、衲衣を着て、悪しき考えの者 (たち) は、(自分たちに関して) 「少ない資具の生活を実践している」と言うでしょう。(第5偈)

味に執着している者たちは、在家者たちに法も説く。六神通を得た者のように、彼らは敬われたりもする。(第6偈)

残虐な心と悪意を持ち、家と財産のことを考え、閑寂な阿蘭若に入って、私たちを誹謗する。(第7偈)

私たちに関してこう言う: 「利益と名誉にとらわれ、これら外道である比丘は、自作の物を説いている。」(第8偈)

「利益と名声のために、自分で經典を作り、集まりの中で説明する。」と、私たちを激しく誹謗する。(第9偈)

王・王子、そして大臣たち・婆羅門・居士たち・他の比丘たちに向かって、(第10偈)

私たちの悪口を言う。「外道である」とも言う。大仙への尊敬から、私たちは全てを忍びましょう。”

著者は、梵本第6偈前半を、阿蘭若住比丘が発した「私たち」に対する罵りの言葉と考えるが、藏訳者の解釈は異なる。

101) ここには「阿蘭若に住む苦行者」とあり、「比丘」という語は出ないが、文脈から見て、阿蘭若比丘であることは明白。

(4)「私たち」は經典を作ったとして非難される(第9偈a; おそらく第8偈dも)

(5)「私たち」は味に執着しているとして非難される(第6偈)

(6)「私たち」は比丘(第8偈c)

さらに、同じ「勸持品」の第18~19偈(§1.1と§1.2を参照)から、次の二つのことが分かる。

(7)「私たち」は集会でこの經典(すなわち法華經)を説こう(第18偈cd)

(8)「私たち」は、仏が託したもの(すなわち法華經)をさらに伝えるために、町や村の人々を訪ねましょう(第19偈)

要するに、「私たち」は、対立する阿蘭若住比丘に新しい經典を作ったと非難されつつも、町や村の人々に法を説く者である。「私たち」は将来も法華經を保持し説き続ける。

上述の偈に先行する散文に拠れば、八十千万億の菩薩がこれらの偈を説いた設定であり、「私たち」とはこれら菩薩だが、実際は、この「私たち」とは『法華經』の作り手・担い手に他ならない。

さらに、阿蘭若住比丘の「私たち」に対する誹謗の言葉は、すでに見た *Abhisamācārikā-Dharmāḥ* や *Rāṣṭrapālāparipṛcchā Sūtra* における阿蘭若住比丘の村住比丘に対する非難——「君たちは舌の先でもっとも美味しい物を探している」 (§ 2.5), 「彼らは常に書物を持ち運んでいる」 (§ 2.6.3) ——に類似していることが注目される。

以上の点から見て、『法華經』は、村住あるいは村志向の比丘たちによって作られたと考えられる¹⁰²⁾。

略号及び引用文献

パーリ聖典は、The Pali Text Society 出版のものを使い、その略号は CPD, Epilegomena に準拠する。

BHS (D, G) = Franklin Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, 2 vols., New Haven 1953: Yale University Press; Reprint: Delhi, ²1970: Motilal Banarsidass.

Bj = 北京, 民族文化宮旧蔵『法華經』梵語写本。注 (2) 参照

Braarvig, Jens (ed.)

2000 *Manuscripts in the Schøyen Collection I*, Buddhist Manuscripts, vol. 1, ed. Jens Braarvig et al.,

102) 望月 (1988: 36f.) と岡田 (2001: 378) は、『法華經』は阿蘭若比丘の立場に立つと考えている様だ。

Oslo (Hermes Publishing).

CPD = *A Critical Pāli Dictionary*, begun by V. Trenckner, ed. D. Andersen et al., Copenhagen, 1924–

D2, D3 = Gilgit 出土『法華經』梵語写本。注 (2) 参照

D (T) = 台北版西藏大藏經, ed. A. W. Barber, 72 vols, 台北 1991 (南天書局)。

Ensink, Jacob

1952 *The Question of Rāstrapāla. Translated and Annotated*. Zwolle (J. J. Tijl).

F = Farhād-Bēg 出土『法華經』梵語写本。注 (2) 参照

von Hinüber, Oskar

1995 “Buddhist Law According to the Theravāda-Vinaya: A Survey of Theory and Practice”, in:
Journal of the International Association of Buddhist Studies 18/1, pp. 7–45.

Jiang, Zhongxin 蒋忠新

1988 *A Sanskrit Manuscript of Saddharmapuṇḍarīka kept in the Library of the Cultural Palace of the Nationalities, Beijing, Romanized Text*, 民族文化宮圖書館藏梵文《妙法蓮華經》写本, ed. Jiang with the preface by Ji Xianlin, Beijing.

1997 蒋忠新編『旅順博物館藏梵文法華經殘片 影印版及羅馬字版』, 旅順博物館・創価学会。

Jinananda, B.

1969 *Abhisamācārikā (Bhikṣuprakīrṇaka)*, ed. by B. Jinananda, Patna (Kashi Prasad Jayaswal Research Institute) (Tibetan Sanskrit Works Series 9).

Karashima, Seishi 辛嶋静志

1992 *The Textual Study of the Chinese Versions of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra — in the light of the Sanskrit and Tibetan Versions*, Tokyo (山喜房佛書林).

2001 “Who Composed the Lotus Sutra? — Antagonism between wilderness and village monks,” in: *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2000*, March 2001, pp. 143–179.

Kern, H

1884 *The Saddharmapuṇḍarīka or the Lotus of the True Law*, Oxford (*The Sacred Books of the East Series*, vol. 21) (repr. 1965, 1980, Delhi).

KN = *Saddharmapuṇḍarīka*, ed. Hendrik Kern and Bunyiu Nanjio, St. Petersburg 1908–1912 : Académie Imperiale des Sciences (Bibliotheca Buddhica X); Reprint: Tokyo 1977 (名著普及会).

Law, Bimala Churn

1952 *The History of the Buddha's Religion; Śāsanavaṃsa*, translated by B. C. Law, London (Luzac) (Sacred Books of the Buddhists, v. 17).

Lü = Jiang 1997

Lokesh Chandra

1976 *Saddharma-puṇḍarīka-sūtra. Kashgar Manuscript*, edited by Lokesh Chandra with a foreword by Heinz Bechert, New Delhi 1976 (Śāta-Piṭaka Series 229) [Reprint: Tokyo, Reiyukai, 1977].

Malmoud, Charles

1976 “Village et forêt dans l'idéologie de l'Inde brāhmanique” in: *Archives Européennes de Sociologie* 17, pp. 3–20.

民族文化宮

1984 『民族文化宮圖書館藏梵文貝葉寫本之一，妙法蓮華經』，民族文化宮，北京。

望月良晃

1988 大乘涅槃經の研究——教団史的考察，東京（春秋社）。

Nakamura, Zuiryū 中村瑞隆

1986 “Dam paḥi chos pad ma dkar po shes bya ba theg pa chen poḥi mdo (7)”, 法華文化研究, No. 12, pp. 267–314.

Norman, K. R.

1971 *The Elders' Verses II, Therīgāthā*, London (PTS).

O = 梵本『法華經』の所謂 Kashgar 写本。注 (2) 参照

岡田行弘

2001 「ナーガールジュナと『法華經』」，『江島惠教博士追悼記念論集 空と実在』，東京（春秋社）。

Olivelle, J. Patrick

1990 “Village vs. Wilderness: Ascetic Ideals and the Hindu World”, in: *Monastic Life in the Christian and Hindu Traditions. A Comparative Study*, ed. Austin B. Creel and Vasudha Narayanan, Lewiston, Queenston, Lampeter (The Edwin Mellen Press) (Studies in Comparative Religion 3).

Prasad, Maulichand

1984 *A Comparative Study of Abhisamācārikā. Abhisamācārikā-Dharma-Vinaya of the Ārya Mahāsāṃghika-Lokottaravādins and the Pali Vinaya of the Theravādins*, Patna (K. P. Jayaswal Research Institute) (Tibetan Sanskrit Works Series 26).

Q = *The Tibetan Tripitaka, Peking Edition* 影印北京版西藏大藏經

Rahula, Walpola

1956 *History of Buddhism in Ceylon. The Anuradhapura period, 3rd Century BC–10th Century AC*, Colombo 1956, ²1966 (Gunasena), Dehiwala ³1993 (The Buddhist Cultural Centre).

Ray, Reginald A.

1994 *Buddhist Saints in India. A Study in Buddhist Values and Orientations*, New York and Oxford (Oxford University Press).

RP = *Rāṣṭrapālāpariṣcchā. Sūtra du Mahāyāna*, ed. Louis Finot, St. Petersburg 1901 (Academy of Sciences) (Bibliotheca Buddhica II); Reprint: Tokyo 1977 (名著普及会).

Sāsanavaṃsa, ed. Mabel Bode, London 1897, Oxford ²1996 (The Pali Text Society).

佐々木閑

2003 「アランヤにおける比丘の生活」『印度學佛教學研究』51.2, pp. 812(221)–806(227).

Śikṣ = *Śikṣāsamuccaya: A Compendium of Buddhist Teaching, Compiled by Śāntideva*, ed. Cecil Bendall, St. Petersburg (Académie imperiale des sciences) (Bibliotheca Buddhica I); Reprint: Tokyo 1977 (名著普及会).

静谷正雄

1974 初期大乘仏教の成立過程，京都（百華苑）。

Silk, Jonathan Alan

- 1994 *The Origins and Early History of the Mahāratnakūṭa Tradition of Mahāyāna Buddhism with a Study of the Ratnarāśīsūtra and Related Materials*, Diss. University of Michigan.

Sprockhoff, Joachim Friedrich

- 1981, 1984 “Aranyaka und Vānaprastha in der Vedischen Literatur. Neue Erwägungen zu einer alten Legende und ihren Problemen” in: *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 25 (1981), pp. 19–90, 28 (1984), pp. 5–43.

Tambiah, Stanley Jeyaraja

- 1976 *World Conqueror and World Renouncer. A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background*, Cambridge, New York etc. (Cambridge University Press).
- 1984 *The Buddhist saints of the forest and the cult of amulets. A study in charisma, hagiography, sectarianism, and millennial Buddhism*, Cambridge, New York etc. (Cambridge University Press).

Toda, Hirofumi 戸田宏文

- 1981 *Saddharmapuṇḍarikasūtra, Central Asian Manuscripts, Romanized Text*, Tokushima (Kyoiku Shuppan Center).
- 1984 “A Classification of the Nepalese Manuscripts of the *Saddharmapuṇḍarikasūtra*”, 『徳島大学教養部紀要 (人文・社会科学)』, vol. 19, 211–256.
- 1989–1991 “*Saddharmapuṇḍarikasūtra*, Nepalese Manuscript (北京民族文化宮圖書館蔵)”, 『徳島大学教養部倫理学科紀要』 17 (1989), 18 (1990), 19 (1990), 20 (1991), 21 (1991).

Watanabe, Shōkō 渡辺照宏

- 1972–1975 *Saddharmapuṇḍarika Manuscripts Found in Gilgit*, ed. and annotated; pt. 2 romanized text, Tokyo (The Reiyukai).